

名も知れぬ行進曲に

鶴田浩二

今もなお忘れぬ忌わしい記憶。荒れ狂った悪魔の季節は、数々の残害をさらけだして過ぎ去った。終戦、無条件降伏に、まだ信じることの出来ない人々の噂は、口から口をついて馳け廻っていた。

当時、横須賀に近い航空基地に予備学生として訓練を続け、死ぬこと以外の何事をも考えることを許されなかった、私達の誰もが、この知せが事実であると解った後も、生への執着はむしろ悲しく、何故我々は死ぬことを許されなかったのだと、のたうちまわった。

この横須賀の基地には、もう飛行機は残っていなかった。航空隊員とは名のみのもので、無条件降伏を信じようとしないうちの中には飛行機にかわる人間魚雷に乗り込んで、何の目標も定めないままに、海の彼方へと消えて行った。私はこの仲間たちの、何の疑問も持とうとしないうちを海辺に見送りながら、何度となくこうした出陣の勇姿を同じ場所で見送った頃の、荘厳な行進曲の吹奏を耳に感じていた。が、我々の勝利を信じてやまないこの日の姿は悲しく、私の耳に残る行進曲は泣いていた。

戦争が終わった。平和がやって来た。この言葉が誰しもの心に納得出来るようになったのは、それからしばらくしてからのことである。がその陰にも、腹を搔切って国の為に殉ずる人も少くなかった。九州のある所に、また厚木飛行場に、米軍が進駐して来たと言う知せを聞き、やがて私達の所へもやって来ることを知って、私達は如何にしてそれを迎えるべきかが話題になっていた。

血気にはやる仲間の中には、自分達の城を明け渡すことに断固として反対し、武士道に恥るものとして、はかない抵抗を示すものも居たが、結局それはむなしいものとして、あきらめながら夫々の故郷へと帰って行った。

私達一部のものには残務整理として、進駐軍を迎え入れる準備に忙がしかった。口惜しさのあまり、仲間たちが破壊して去った窓ガラスや、棚の修理も完了し、床も綺麗に磨き上げて、何時来ても決して恥かしくないだけの準備はととのった。そんな手入れをしながら、若い私の胸の中にただ悲しさだけが一杯だったことを憶えている。兵器資材の一切の引渡しも、明確に提示出来るように滞りなく終えた。

明日進駐軍がやってくる、と言う知せに、何故か私は身の引締る感じがした。B29が頭のすぐ上まで低空飛行して、何機も過ぎて行く。私達の誇りだった12センチの高角砲も、自らの意識を失った置物の如く、ただ天にその亡骸を茫然ととどめているに過ぎない。悠々と飛ぶ姿は私達の行動を監視する意味であろうか、まぶしく輝く巨体には、平和を呼び合うものよりも、半ば恐怖をもち、爆弾こそ落ちてはこなかったが、何時でもその用意が出来ているといった表情をしていた。

進駐軍を待つ私達の兵舎から横須賀の要所が一目で見渡された。が、その一つ一つはも

早、生きてはいなかった。秋の風が、無人の館を音もなく通り過ぎるような孤独さがあった。東南門に残された数々の思い出も今の私には遠く感動は薄れていた。

と、その静寂を震わすようなざわめきが、下の方で起った。到々(とうとう)やって来たのだ。私達の誰もがそれを感じ、云いあらわすことの出来ないおののきが全身を走った。そして何分間かがそのおののきのうちに過ぎた。見ると、無数の黒い影がずっと続いている。それが東南門をくぐる時、私は自分の体の一部を踏みつけられるような気がした。完全武装に包まれた兵隊の手にある銃口のどれかが、一斉にこちらを向いていた。その上に、眼の色も肌の色も違った顔があった、が、みんな人間には真違いなかった。

その時私は、学生時代によく世話になった懐しい一人の人を思い浮べていた。当時、学校の卓球部に籍を置いていた<sup>1</sup>私達の所に、よくコーチに来て下さった先輩の顔である。その先輩は、口ぐせのように卓球は世界のスポーツである。この狭いテーブルの上で近き将来に必ず世界の誰もが顔を合せその妙技を展開するであろうと、私達によく話して下さいました。

それは戦前その先輩が、ある大学の卓球部で活躍していた頃、地方の湖に近い旅館に合宿していた時だった。朝の軽いトレーニングから、仲間同志でプレイをとっていた時、その旅館の泊り客らしい外人がニコニコ笑いながら傍で見っていた。練習も一段落ついた時、その外人が先輩の所へ近づいて、「一寸やらしてみてくれないか」と云うのである。

その申出に先輩は面喰ったそうだが、傍のラケットを貸すと、不思議そうに二度三度振ってみたが、やがて、どうぞ、と云う構えをした。みるとラケットの待ちかたが日本人とは違って丁度庖丁でも握っているような格構である。打合ってみると、そのままの姿勢で、カットもスマッシュも鋭く入ってくる、ことにバックから叩きつけるような打球は迫いきれないような激しさがあった。汗を拭いながら、その外人は親しそうな笑みを浮かべ、有難うを述べたのち、

「貴方達は全く素晴らしい、私達の国でも盛んです。何時かきっと世界中の人が集まってプレイをする日が来るでしょう」と堅く先輩の手を握りしめたとのことである。

その先輩は卓球を世界のものとして夢見ながら、異郷の土で帰らぬ人となったが。そして戦況が激しくなると共に、卓球は国体から除外されその先輩の意志も敢えて断ち消されてしまったのである。

平和な時が来れば、そして現在その平和は目の前にやって来ている。その筈なのに —— 私は先輩の話に出て来た外人の顔を、現在目前に居る人達の顔からとても想像することが出来なかった。

注意深く、私達に敵意のないことを確かめるように巡回しながら私達が綺麗に磨きあげた廊下を泥靴のまま歩き廻り、怪しいと思えば銃のうしろでドアを叩き壊し時々鋭い視線を私達の方へ浴せた。そんな姿を私達は遠くの視線で追っているだけだった。そのあとには、私達の仲間が口惜しまぎれに残して行った姿よりも、尚醜いおののきがあるように思えた。やがて敵意のないことを確かめると、どうやら一同は整列するらしかった。何時の間にか用意したのか軍楽隊の一団が夫々の腕に楽器を抱えていた。整列した米軍の前に私達数

<sup>1</sup> 第 12 回明治神宮国民体育大会(S16)の大阪代表になるも卓球は競技種目より除外さる。

人の学徒兵が並ばされた。どうやら街の中を行進するようだ。先頭を指揮する米軍将校の合図で、うしろの楽隊が一斉に吹奏を開始した。

その音は、丁度、お化け退治に出かける憶病者が、景気をつけるために口笛をふいたり、歌をはりあげたりするのに似ていると思った。が、ふと気がつくと、私達のうしろには冷たい銃口が突きつけられていた。瞬間私は激しい憤りにかりたてられた。何故こんなにまでされなければならないのだ。私達は身に寸鉄も帯びていない。むしろ、勝利者を迎える意味で、決して恥かしくない姿で迎えたいものと努力して来たのに。だが私のうしろにある足音、行進曲、そして銃口は、全く親しさのないものばかりだった。

私はまた先輩の言葉を思い返していた。人間と人間が、何故こうまでして、こんな姿で逢わなければならないのか、何がそうさせたのか。私の頭の中にはガンガンと響く行進曲が残った。これだ、国と国との戦いに、何の憎しみも持たない人間同志までが、敵となり殺し合い、醜い姿を晒(さ)らけ出さねばならない。

東南門が遠くなった。私はもう一度、親しみをこめた目で振返った。だが相手の目は私の目を感じてくれそうにもなく、銃口は相変わらず冷たく光っていた。

また私の耳に行進曲が大きく響いた。それは勝誇っているかのように聞えてならなかった。それは人間の心に泌(しみ)るものでもなければ、力づけてくれるものでもなかった。国のためにむなしく犠牲となった人達の悲しい叫びとしか感じられなかった。私はこの曲を憎む、私はもう銃口も敵意を含んだ視線を感じてはいなかった ——。

その時から、私にはこの曲が忌(い)むらしい記憶の壁に塗り込められて忘れられないものとなった。今でも私はそのメロディを耳にすると激しい憎悪にかりたてられる。この曲の下に集まって、生命の美しさも奪(うば)って奪(うば)い去った悲しい事実を許すことは出来ない。

そして、「何時かきっと世界中の人が集まって、プレイをする日が来るでしょう」と云った外人の顔を、この上ない平和なものとして懐(な)しみ、想像してみるのだった。